

ユリエルカ

く墮とされた精霊騎士団長く

郡山 伏郷

一千人の女騎士達を率いる精霊騎士団長にして、スレイウルツ王国最高位の女騎士であるユリエルカが帰還した。

敵対する帝国軍の男達に、全身を内と外からくまなく穢されて。

部下の裏切りにより敵に捕らわれていた彼女は監視の目を欺き帝国軍の要塞から脱出したが、今になって思えば、より大きな屈辱を

与えるために帝国軍はわざと女騎士団長を逃がしたのだらう。

王国軍長距離レンジャー隊に収容されたユリエルカは城に帰参するなり神官に体をあらためられ、処女を失っている事が分かると十分な休息も与えられずに審問会の場へと引きずり出された。

「貴公は、魔法により調合された薬を飲まされたと、そう主張されるわけですね？」

広い審問の間に、聞き取りを行っている審問官の声が響いた。

「そうだ。仰向けに体を固定されたまま、口に咬まされた拘束具の間から理性を失わせる薬を流し込まれ、私は窒息を避けるためにそれを飲まざるを得なかったのだ。従って、これ以降の事に私は一切の責任を持ち得ない」

「しかし、その薬が本当にそういう効力を持っていたのか、それとも貴公がそう思い込んでいただけなのか証明する手立てがありません

せん。よって、薬の件は考慮の外とします」
（このっ……私より下層の生まれの者が偉そ
うに！）

ユリエルカは胸中で毒づくところ、若い審問官
を睨みつけた。二百歳を超える審問官も多い
中、彼はまだ百歳を過ぎたばかりだった。

理由がなんであれ、騎士階級に生まれた女
として女神に捧げた純潔の誓いを破った彼女
が、騎士の位に留まれる望みはほとんどな
かった。それは、彼女自身が審問会で過ちを
犯した女騎士の位を幾度と無く剥奪してきた
のだから判りきっている。おそらく、下位の
剣士に身分を落とされることだろう。

だが、彼女が喜んで男を迎え入れたと判断
されれば、さらに恐ろしい罰が彼女に科せら
れる。それを思うと、体を隠すために一枚だ
け与えられた粗末な布の下で全裸の体が震え
た。

「それでは薬を飲んだ後に、何が行われたの
かをお話ください」

細い眉を上げ、周囲の高い席から彼女を見ている十二人の賢者達を見回してから、ユリエルカは喋り始める。

「四人：：屈強な男性が四人、部屋に残った。彼らは、私の戒めを解くと鎧を脱がし、聖衣も奪った。呪文と薬で体の自由をほとんど奪われていた私は全裸にされ、胸を：：乳房を、掴まれた。かなり、強い力でだ」
ユリエルカはできるだけ、感情を込めず、他人事のように話す。

もし、騎士団長という要職にありながら肉欲の誘惑に負けたとなれば、死刑のない王国における最高刑――即ち、下層世界への魂の追放が待っている。

魔法学も神秘学も持たない野蛮人がうごめき、混沌が支配するという下層世界への転生。それだけは、絶対に避けたかった。
「それから、男性の一人が仰向けになった。私は、強引にその男性の顔をまたがされ、よつん這いとなり男性の股間へ顔を押し付けら

れた。そして……男性器を、口に含むことを強要された」

「そのような事を、どうやって強要されたのですか？」

審問官が手を上げてユリエルカの言葉を遮り、質問する。

「閉じている口を開けさせるというのは大変難しいことです。貴公が自分の意思で口を開いたのではないのですか？」

「違う！ 私は、鼻を強く手でつままれ、息をするために……」

「呼吸するだけなら、男性器が入るほど大きく口を開ける必要はないのではありませんか？」

「わからない……薬も……だいたい回って……」

「先ほども申しました通り、薬の件は考慮しません」

ユリエルカは、賢者と並んで二人のやりとりを高い席から聞いている兄、ヴァルツアン

トの方を見た。その席は、女騎士の審問会ならユリエルカが座る席であつた。

親衛騎士団長であるヴァルツァントは精霊騎士団長の審問という異例の事態のために、ユリエルカと直接の主従関係にある国王の代理として審問会に参加している。だが、黙秘を封じるために魔法の首輪をはめられた妹の救いを求める視線にも彼は心動かされることなく、冷たい眼差しで見返すだけだつた。

「先を続けてください」
審問官にうながされ、ユリエルカは思い出すままに帝国軍要塞内で受けた陵辱について話す。もし、思い出しておきながら故意に隠そうとすれば、首に巻かれた首輪はたちまちに彼女の首を締め上げるようになっていた。
「それから……下にいる男性が、私の腰を掴んで引き寄せ、私は……股間を……舐められた」

「股間とは、具体的にはどこですか？」

「……女性器だ。それから、肛門も……」

「女性器とは、具体的にはどこですか？」
（………そんなことを聞くのに、何の意味があるのだ！）

思わず叫び出しそうになるのをぐつところらえ、質問に答える。

「陰核と………それから、膣口だ………それらを舐められながら、私は上から強く頭を押され、口の中の男性器を唇と舌、それから喉でしごくことを強要された………その間に、他の男性が私の後ろから乳房を強く握った。乳首を指でつねられ、全体をこねまわされ………それから………髪を掴んで顔を引き上げられ、別の男性の性器を口に入れられた」

「また、鼻を塞がれたのですか？」

「………いや………よく、覚えていない………」
「抵抗しなかったと解釈してよろしいですね？」

「違う！ 抵抗はした！ だが、声が………声が出てしまつて………」

「どのような声ですか？」

「………あえぎ声だ」

「それは、どのような声ですか？」

「その……『あつ、あつ』とか『あん、あ
ん』といった声だったと………思う」

（せめて………せめて、下卑た笑いの一つも漏
らしてくれれば………）

ユリエルカは審問官とのやりとりを聞いて
いる賢者達を見回した。皆、無表情に彼女の
言葉を聞いているのが、返って屈辱的だっ
た。

（………帝国軍の男達は、よく笑った
な………）

脳内に起こった考えをユリエルカは慌てて
打ち消す。

自分を穢した者達と賢者や神官を比べるな
ど、決して許される事ではない。

「それから………また別の男性が、私の肛門へ
指を入れた。かなり深く入っていたと思

う………そのままの姿勢が、しばらく続いた」

「そのまま、というのはどのような状態です

か？」

再び話し始めた彼女の言葉を、すぐに審問官が遮る。ユリエルカは苛立ちを抑える努力をしなければならなかった。

「一人の男性が私の女性器……特に膣口と陰核を舐め、別の男性が背後から私の乳房を掴み、また別の男性が私の肛門に入れた指を動かす、私は残る男性の陰茎を口に含んだ状態だ」

「わかりました。それから、どうになりましたか？」

「そして……私の口に性器を入れた男性が、少し自分の手で性器をしごき、射精した」

「どこへですか？」

「そんなこと、聞くまでもなく決まっているではないか……」

「私の口の中へだ……そのまま性器が抜かれないので、私は呼吸のために精液を飲まざるを得なかった。それから……私は髪を掴んで体を引き起こされ……いつ！」

首に巻かれた魔法の首輪がきつく締まり、喉が鳴った。両手の指をなんとか首輪の中へ入れようとするが、すでに喉に食い込んだ首輪を引つかくことしかできない。

「あつ：：あつ：：う：：うう：：」

床に倒れ、喉を掴んだままのたうつ。王国の女騎士達の憧れの的であつた長い銀の髪が石の床に広がり、体を覆っていた布がはだけて白い肌があらわとなつた。

「少し緩めてください：：正確に全てを話してください。なにか、自分に不利になる事を隠蔽しようとしませんでしたね？」

審問官が控えている魔導師を呼んだ。魔導師が首輪に触れて呪文を詠唱するとわずかながら首輪が緩み、呼吸ができるようになる。「わつ：：私は！ 私は、達した！ 絶頂に達した！」

なんとか叫ぶと、首輪が緩んだ。

「詳しくお話ください。それは、どのような感じですか？」

「せつ…精液を…飲み込んだ途端に、体が、熱くなつた…そして…肛門と膣口が…滑らかになるのを感じ…それから…下半身が震え…下の男性に陰核を強く吸われ、後ろから肛門の奥まで指を何度か…途中からは、二本の指を何度か奥まで入れられ…私は、体が震えて…」
ユリエルカは下半身が熱くなるのを感じ、慌てて姿勢を直し豊かな乳房の前で布を合わせた。
（体が…おかしい…）
審問会で、自分が犯された事を証言しながら性的に興奮するなど、正気とは思えない。
決闘を前にした時のように、ゆつくりと深い呼吸で気持ちを落ち着けてから先を続ける。
「そして…背筋が、すつと冷たくなって、体の中心を真っ直ぐ、突き抜けるような感じがあつた。頭の中が…鈍く重くなるような感じで、大きな声を出していたような気がす

るが：：詳しくは、思い出せない。私は、その時、絶頂に達していたのだと思う」

「結構です。その後で、髪を捕まれましたのですね？」

「そうだ。達してしまつたため、私は力を入れることができなくなり：：口を閉じることもできなくなつた。口を開けた私の顔を男性達は笑い、私は床に仰向けに倒された。そして、まだ射精していなかつた三人の男性が私を取り囲み、性器をしごき始めた」

三人の男性の、透明な液体を先端から溢れさせた逞しい男根が顔に向けられた光景が脳裏に甦つた途端、再び下半身に熱い欲望が湧き上がるのを感じた。

（薬だ：：きつと、帝国軍に飲まされたあの薬が、まだ体内に残っているに違いない：：）

そう思いながら、証言を続ける。

「一人が強引に私の手を取り、男根を掴むことを強要した。もう一人の男性は私の胴にま

たがり、乳房の間に性器を入れ、左右から乳房を手で押さえつけて性器を挟むと、腰を前後させた。それから……もう一人は、私の髪を性器に巻きつけ、その上から自分の手でしごいていた。男性が……誰が最初だったのかは、覚えていない。三人は順番に、私の顔へ向けて射精をした。私は、口を開けていたので、口の中へも精液が入った。

「口の中へ入った精液はどうしたのですか？」

「……飲み込んだ……」

「口を閉じることは、できなかつたのですか？」

「力が……入らなかつたのだ……」

「力が入らないのに、精液を飲み込むことはできたのですね？」

「いや、それはっ！」

「弁解は結構です。それから、どうになりましたか？」

（なぜ、この愚か者は私のいう事を認めよう

としない：：私は、帝国軍のおぞましい邪術
で理性を破壊されたのだ：：そうでなければ
ば、私が性欲を感じるなど有り得ないではな
いか：：私は、王国一千人の女騎士を率いる
精霊騎士団長なのだぞ）
湧き上がる苛立ちと、油断すると背筋を這
い上がってこようとする性欲を必死に抑え、
平静を保とうとする。ユリエルカは、いつの
まにか内股と胸にじつとりと汗をかいてい
た。
「：：最初に、口の中へ射精した男性が、私
の両足首を掴んで足を広げ：：そして、私の
膣へと男性器を挿入した。私は：：処女を
失った。痛みにも、叫んだことを覚えている。
挿入した男性は、構わずそのまま男性器を出
し入れた。膣を締めるように言われた
が：：それができないために乳房を何度か平
手で叩かれた。痛みで体に力が入り：：私の
膣が男性器を締め付けるのが、自分でも判つ
た：：」

もしかすると、帝国軍に飲まされたのは薬
ではなく、体内に留まり性欲を喚起する液体
状の魔法生物だったのかもしれない。それな
ら、高位の魔導師なら今だ体内に留まってい
るそれを取り出すことも可能だろう。そうす
れば、邪術でやむを得ず帝国軍の言いなりと
なっていた事が証明できる。

（そうだ：：そうに違いない。私が：：王国
最高位の女騎士であるこの私が、剣士に身分
を落とされるなどあつてはならない：：愚か
な審問官め、お前の責任は後でじっくりと追
及させてもらうぞ：：）

だが、そのためには、まず審問会を終わら
せなければならぬ。ユリエルカは審問官を
睨みつけながら証言を続けた。
「しばらく、そうやって女性器を突かれた後
で、私は乳房を掴まれ立ち上がることを強要
された。私は仰向けに寝ている男性の上に背
中を向けて座らされ、男性は性器を：：私の
肛門へと挿入した。そして、もう一人の男性

がそのまま、私の膣に性器を入れた。二人はそれぞれ、肛門と膣に性器を出し入れし、私は残りの二人の性器を握らされ、しごくことを強要された」

ふと、ユリエルカの指先が熱く濡れたものに触れた。思わず、小さな声が漏れる。

「あつ：：」

次の瞬間、それが無意識に手をのぼして触れた自分の秘部だということに気づき、背筋が寒くなった。

（：：なぜ、私は性器を濡らしているのだ：：）

「どうされましたか？」

ユリエルカがおどおどと周囲を窺っていることに気づき、審問官が声をかける。

「な、なんでもない：：」

「それでは、続けてください」

なんとか平静を保とうと、目を閉じてゆっくりと呼吸を整えてから先を続ける。

「私に性器を握らせていた男性の一人が私の

髪を掴み、私の口の中へ自分の性器を押し込んだ。そして、そのまま：：根元を自分の手でしごき、私の口の中へ射精した。私は：：その精液を飲み込んだ」

精液を飲んだ事に関して何か言われるかと思ひ、審問官の方を見たが、特に質問はないようだった。

「それから：：私の膈に性器を出し入れしている男性が、私の乳房を強く掴み、性器を奥まで入れ、射精した。体の中で射精をされ、私は：：あまり、ものが考えられなくなつた。頭がはつきりせず、足も震えて：：私は、再び達していたのだと思う」

「達した時、貴公はなにか言いましたか？」

審問官に言われ、その瞬間の事ははつきりと思ひ出してしまった。忘れていれば言わずに済んだが、思ひ出した以上は言わなければ再び首輪に首を絞められることとなる。

「『いい』：：と：：」

「はつきりと、正確に言つてください」

「私は、『気持ちいい』……と、言ったのだ
と思う……」

ユリエルカはうつむき、かすかな声で言っ
た。そして、視線だけをそつと上へ向けて居
並ぶ賢者達を見るが、彼らは相変わらずなん
の表情もないままに座っている。重苦しい沈
黙の中、彼女は小声でさらに先を続ける。

「それから……性器の中へ射精した男性が、
別の男性と交代した……その男性も、激しく
私の体の中へ性器を出し入れし……肛門と、
膣へ性器を出し入れされた私は、達したま
ま……全身が震えて……そして、肛門と、膣
へ射精され……」

「膣に射精された精液はどうなりました
か？」
（このっ……）

審問官というのは、本当に苛立たしい質問
ばかりしてくる。

「奥に……子宮口に押し付けられたまま、射
精されたのだ、子宮の中へ入ったのだらう」

「全部は入らないでしょう。残りはどうなり
ましたか？」

「それは……」
思わず言いよどむと、途端に首輪がぎ
りっ、と圧力を増した。

「膺の、膺の中に、残った精液は、座って足
を開き、指を入れてこぼした……こぼした精
液は……手で受け……」

ユリエルカは首輪と首の間に残されたわず
かな隙間に指を入れた。しかし、そんなこと
でこの恐ろしい首輪の圧力が少しでも緩まる
ものではない事は十分にわかっている。過去
の審問会で何を思ったのか、最後まで証言を
拒否したために喉を潰されて死んだ女騎士さ
えいたのを、彼女はその目で見ている。
首輪が締まる前に、全てを喋るしかなかっ
た。

「私は……その手を……舐めた……」

「自発的にですね？」

「私は！ 私は帝国軍の邪術で理性を破壊さ

れたたていたのだ！ 自発的ではない！ 私
は：：「

「もう、いいでしょう」

賢者の一人が発言を遮った。

「あなたが肉欲の虜となつて帰つて来たことは、もはや疑いようがありません。残念なことです」

「しかし！ 私は敵の要塞の内部を見てきました、その構造を覚えておりますので：：」
ユリエルカは慌てて抗弁する。

「敵の要塞を偵察するためなら、純潔を捨て肉欲の虜になつても良い、と言うのか？」

別の方角から、一人の賢者が彼女に尋ねた。

「い、いえ：：そういうわけでは：：」

「辱めを受けるぐらいなら、死を選ぶことはできなかつたのか？」

「自ら死を選ぶ事は我が女神に禁じられております！」

「肉欲に溺れることも禁じられているのではな

いか」

「それは……！」

「貴公は今、自らの意思で死よりは肉欲に溺れることを選んだと言ったのだぞ」

「私は悪くない！ 私が悪いわけではない！」

思わず賢者達の席へ詰め寄ろうとしたユリエルカの前に、席を立ったヴァルツアントが立ちふさがった。長い剣を腰に吊るし、親衛騎士団の銀の鎧を着た背の高い兄を見上げながら、ユリエルカは必死に自分の無罪を訴える。

「お……お兄様……私……何も悪くはない……」

「親衛騎士団長、彼女の性器をあらためよ」
賢者に言われ、ヴァルツアントは妹の体をかろうじて隠していた布を奪い取った。そして、体を隠そうとする彼女の腕を掴み捻り上げる。

「抵抗するのなら、首輪を締めさせるぞ」

兄の抑揚のない声を聞き、身をよじつていたユリエルカがおとなしくなるとヴァルツァントは片手の手甲を外し、手を妹の下腹へ当てた。そして、無表情のまま指を挿し込む。――ぬちゅ……

「あうっ……」

兄の長い指が濡れた性器の奥深くまで入り込む感触に、ユリエルカは顎を上げ声を漏らした。

ヴァルツァントは手首を捻って膣の中で指を回してから抜くと、手を掲げて愛液に濡れてぬめる指を賢者達に見せた。

「この者は欲情しております」

「これ以上は時間の浪費である」

賢者の一人が言った。

「精霊騎士団長という要職にありながら自ら進んで愛欲に溺れ、しかも今なお肉欲の虜となっっているとは、全く酌量の余地はない。当審問会はユリエルカ・レク・ガリヒの全官位及び階級を剥奪し、下層世界へ魂を追放する

のが妥当であると結論する」

「そんなっ！」

「審問会を終了する」

呆然とするユリエルカをそのままに、賢者達は席を立ち始めていた。

「聞いてください！ 私は、私は……」

ユリエルカは大声で賢者達を引きとめようとする。

「もう終わったのだ。諦めろ」

手甲をはめなおした兄の手がユリエルカの肩を掴み、乱暴に後ろへ引いた。取り乱しているユリエルカは無様に後ろに倒れ、尻をつく。

「お兄様！ どうかわたしの話を！」

なおも足元に取りすがろうとする妹を冷たい目で見下ろした次の瞬間、ヴァルツァントが躊躇なく思い切り足を振り抜き、銀のすね当てがユリエルカの顔を激しく打っていた。

「穢れた者と話すことなどない」

悲鳴を上げながら床に倒れ、両手で顔を

覆ったユリエルカにそう言うと、ヴァルツァントは部屋を出て行った。

「あ……あ……」

激痛に声を漏らしながらユリエルカが顔を覆っていた手を離すと、手のひらにはどくどくと血が流れ落ち、折れた歯が何本か溜まっている。

しかしこれはまだ、この後に待っている本当の罰の始まりでさえない。

ユリエルカはこれまで、何度となく見送ってきた罪人達の姿を思い出していた。

処刑室の床に描かれた魔方陣の中央で泣き叫ぶうちに魂を追放され、突然がくりと崩れ落ちる罪人達。今度は、彼女があそこから下層世界へと追放される。

「どうか！　どうかお慈悲を！」

ユリエルカは恐怖に震えながら必死で叫んでいた。

「せめて……せめて、ひとおもいに殺してください！」

しかし、部屋を退室していく賢者達は、その声に振り返ろうとさえしなかった。

うつすらと明るくなりつつある自分の部屋のベッドで、三島 歌奈（みしま かな）は目を覚ました。

（また……あの夢か……）

ぼんやりと、自分の手を顔の前にかざす。だが、そこにあるのは長くしなやかな指で

剣を握っていた精霊騎士団長の手ではなく、全体的に柔らかい形をした歌奈の手だった。

一年ほど前、無免許の原付バイクの荷台に乗っていた歌奈は交差点で事故に遭い、電柱に激しく叩き付けられた。

折れた肋骨が肺に刺さり、自分の血で窒息した彼女は、搬送された病院で一度は完全に死亡する。

そして、悲嘆に暮れる両親の目の前で彼女が生き返った時、その体にはユリエルカの魂が宿っていた。

言語だけは魂とは別の場所が覚えているように、新しい世界の言葉で会話することができたが、精神のそれ以外の部分では彼女は王国精霊騎士団長のままだった。

白衣の医師達に怯え、電灯がなかなか理解できず、看護師が暇つぶしにと運び込んだテレビに驚いて逃げようとしていた彼女だったが、今では新しい生活にも少しづつ慣れ始めていた。

しばらく手を見つめてから布団をどけ体を起こすと、部屋の隅に置かれた姿見に淡い水色のパジャマを着た姿が映った。

歌奈の黒に近い茶色い瞳が鏡の中から見つ

め返してくる。

オレンジがかつたピンク色の肌。黒い髪は肩の下まであり、この世界では長い方だ。彫りの浅い、なだらかな目鼻立ちと薄い唇、尖っていない丸い耳。顎は細く、とても剣を振るために奥歯に力を入れられそうにない。ユリエルカは視線を落とし、歌奈の体を見る。

パジャマをゆるやかに持ち上げている胸は薄く、筋肉はほとんどない。そして、その下につながる細すぎる腰と、幅の狭い骨盤。手足も細く、自分の体重を支えるのがやつと、というところだろう。

こんな細い体と小さい乳房で将来、子を育てることができるのだろうか。この体は、女として大事なものがいろいろと欠けているよ

うな気がする。

これまでこの姿を見るのが嫌で何度も鏡を割ろうとしたが、それが何の解決にもならな

い事を自分に言い聞かせてなんとか思いとど

まっってきた。
歌奈のことをユリエルカは醜いとは思わな
かつたし、むしろ小さくまとまった顔立ちと
体には小動物のような華奢なかわいらしさが
あると思う。
だが、大柄な体で長い剣を扱っていたユリ
エルカには、それさえもが今は疎ましかつ
た。
（今は：：短い針が「5」を指しているとい
うことは、まだ朝の早いうちか：：）
ユリエルカはふと時計を見上げ、まだ起き
るには早い時間であることを知った。
機械が示す数字に従って生活する、という
のは始めのうちには抵抗があつたが、逆にその
文字盤を見れば今が一日のどれぐらいに位置
しているのか分かるというのはなかなか便利
だつた。
歌奈の両親が目覚めてくるまでには、もう
少し時間がある。

できればもう一度眠ろうと布団に入りなおすが、そのはずみで足の合わせ目がぬるりと粘液にすべるのを感じた。

（また：：この女の体が発情している：：）
審問会の夢を見た後は、いつもそうだった。

性器からじわりと這い上がってくる欲望が、寝起きのはっきりしない意識の中で存在感を大きくしつつある。

ふと気づくと、歌奈の細い手がパジャマの上からなだらかな胸を両手でゆつくりと寄せようにもみしだいていた。

「あつ：：」
小さな乳首に指先が触れ、思わず声が漏れる。

（騎士なのに：：私は上級騎士なのに：：こんな：：）

布団の中で手を伸ばしてパジャマのズボンの中に入れてると、内股がじつとりと濡れている感触が細い指先に伝わった。

たまらずに指を強く押し当て、柔らかい下着の上から谷間を何度もなぞる。

「んっ……」

（ああ……また、この女の体を鎮めてやらなければならぬ……）

ベッドから降りると、学習机の上に置いてある歌奈の携帯電話を取り、再び布団の中へ戻った。

宝石のようにキラキラと光る装飾がされているその小さな機械の表面には、事故の時についた大きな傷が残っている。

半分に折りたたまれている機械を開いたユリエルカは指先でボタンを一つづつゆっくりと押すと、以前に物珍しさと好奇心で弄り回しているうちに偶然に再生してしまった動画を、また呼び出した。

『歌奈です、ハメ録りしちゃいまあす』
撮影者の声がある。

『セフレでイケメンのユウキです。お小遣い二万円くれましたあ♪』

画面の中で歌奈の部屋の景色が揺れ、汚らしい色の髪をした筋肉のないみすぼらしい男が写った。

『ユウキ、パソコン詳しいから、この動画パソコンで見たりできるんでしょ？』

『ああ、できるよ』

『お小遣いいっぱいくれたら、この動画ユウキにあげてもいいよ〜♪』

『なんだ、金取るのかよ』

『うちのクソ親が悪いんだよお。シケててさ、小遣い全然くれないの。遺産残して早く死ねつつーの』

（あんな優しい御両親に……この女はなんて事を言うのだ……）

上級騎士の家庭に生まれ、やっと歩けるようになったところから些細な過ちの罰として親から酷い体罰を受け続けていたユリエルカにとつて、彼女が生き返ったことを喜び、いつも微笑みながらリハビリを献身的に手伝ってくれた歌奈の両親は、信じられないほどの慈

愛の精神に満ちた存在だった。

全く人格が変わり、一般常識まで失ってしまつた彼女になぜそこまで尽くしてくれるのか、今でもユリエルカには不思議でならない。

『俺の親も早く死なねえかな』

男が言い、二人がケラケラと笑う。画面が揺れ、小さな機械の中では二人が舌を伸ばして先端を絡め、互いの舌先を舐めあい始めていた。片手でシャツの上から胸を触っている歌奈が、画面の中から視線を送ってくる。

（他人と舌を絡めあうなんて……汚らし
い……こいつらは、どうかしている……）

初めてこの動画を見た時は、そのおぞまし
さから思わず機械を放り出してしまつた。し
かし、汚らしいと思いなながらも今は動画を
じつと凝視し、片手で柔らかい秘部を布越し
に何度も撫でている。そこを覆い隠す滑らか
な布は、すでにじつとりと濡れ始めていた。
『歌奈、俺が撮つてやるから、オナニーし

てみせろよ』

『いいよお♪ 歌奈のエッチなところ、いっぱい撮ってね♪』

口を離した男に言われ、歌奈は床の上に脚を投げ出すように座った。そして、スカートを捲り上げると下着の上から指で股間を撫でる。

『なんだよ、もう濡れてるじゃないか。エロいな、歌奈は』

『だってえ、ユウキのおち○ちん、はやく入れたいんだもくん♪』

『指、挿れて広げてみせろよ。見ててやるから』

男に言われ、画面の中で歌奈が立ち上がり下着を脱いだ。彼女は脚を広げて座りなおすと、片手で自分の細いすじのような性器の谷間を広げ、もう片方の手の指をいきなり三本まとめて肉の穴へと沈めていく。

『見て。歌奈のおま○こ、広がっちゃうよ』

歌奈が淫猥な笑みを浮かべた顔を上げ、画

面の方を見ながら言う。

『ま〇こすげえ広がってるじゃん』

『ユウキのおち〇ちん入れると、もつと広がるよ♪』

動画を何度か見るうちに、彼らが性器を指すのに使う下品な淫語は覚えてしまった。二人は躊躇なく、その言葉を繰り返し口にする。

（このっ：：淫らな獣め：：お前らには貞淑や恥らいという概念はないのか：：）

とても理性というものが備わっているとは思えない二人をユリエルカは心の中で罵るが、その間にも片手では蜜をじわりと溢れさせる谷間を布の上から触り続けている。

『ユウキ、後ろから撮って♪』

歌奈は犬のように四つんばいになって尻を画面の方へ向けると、手を股間へ伸ばしてまとめた指を膣の奥深くへ出し入れして見せた。

粘液が引きずられるように溢れ出て、細く

したたり落ちるのが粗い画像でも分かる。
ユリエルカは一旦は目を伏せるが、すぐに
視線を上げると歌奈の性器の中へと指が繰り
返し入り込むのを見つめ続ける。
『歌奈、指オナで気持ち良くなつてきちやつ
たあ♪』
歌奈が背中を反らせながら切ない声で言
う。
（そんな細い裂け目のような性器に……奥ま
で指を……三本も……）
動画を見ながら片手で触り続けている股間
は下着の上からでもはつきりとわかるほどに
ぬめり、深い息がパジャマの下でなだらかな
胸を上下させている。
『凄いい音してるぞ、ほれ』
『ああくん、気持ちいいよおお』
画面が接合部に近づいた。画像はぼやけて
しまいが、その代わりに淫らな、濡れた音が
携帯から聞こえてくる。
| | にゆちゆ……くちゆ……ぐちゆう……

何度も見ているので、しばらくは濡れた音がするばかりで画面がはつきりと映っていないのは分かっていゝる。ユリエルカはその間にパジャマのズボンを脱いでしまうと、パンツの中へ手を入れて直接に秘部に触つた。――くちゅっ……

機械から聞こえるのと同じような濡れた音が布団の中から聞こえる。

『歌奈、口ま〇こするね』

目をつぶつたユリエルカが濡れた谷間の奥を指で繰り返しなぞっていると、歌奈の声が聞こえた。

いつの間にか小さく丸まるようにしていた体を伸ばして小さな機械を覗き込むと、画面の中では歌奈がひざまづいて男性器を口に含んだまま、淫靡な笑みを浮かべていゝる。

（男のものを喜んで……この……淫売めが！）

歌奈は画面を見上げながら、時々見せ付けるように口から陰莖を出して全体を舐め上げ

る。しばらくそうしてから、歌奈は竿の下の袋に口を寄せ、柔らかいそれを口で吸いながら引つ張り、指先でくすぐった。陰囊を口でもてあそぶ間、手では陰茎をしごき上げ、その圧力で筒先の小さな割れ目から透明な液体が溢れるのが画面に映る。

歌奈の指先が尿道の先で膨れ上がった球に触れ、崩れた粘液を亀頭全体に塗り広げていった。体の動きから、その間も彼女は自分の秘裂へ突き入れた指で体の内側をこすっているのが分かる。

（手と口で……男を……けだものめ……穢らわしいけだものめ……）

だが、ユリエルカ自身も無意識のうちに唇に軽く握った手をあてて口を開けると、架空の男根に口淫を与えるかのように舌を動かしていた。

――ぷちゅ……くちゅ……

唇と舌が、濡れた音をたてる。

『んっ……ん……んっ……』

『そこ：：裏側、マジ気持ちいいな』

画面を見ながら、自分も広がった傘の裏側を舐めているつもりで突き出した舌先を小刻みに動かす。

『そろそろ挿れさせてくれよ』

男の声と共に、また画面が揺れた。

『いいよ♪ 挿れるところ、ちゃんと撮ってね♪』

画面は、仰向けに寝そべった男の体を見下ろすようなアングルになった。勃起したペニスの上に、歌奈が画面の方を見ながら片手で濡れた肉の膨らみを左右に押し分けたまま腰を下ろしていく。

「あああつ：：」

潤った谷間の中の淡い色の入り口を押し広げ、丸い亀頭が入り込んでいくのを見て、ユリエルカの思わず漏らした声が携帯電話から聞こえる声と被った。

『あああつ！ おち○ちん、入ってくるう！ ユウキのおち○ちん、歌奈のおま○こに入っ

てくるよっ！』

画面が結合部に近づき、歌奈が少し体を後ろに反らせたために肉穴へ男の体がぬっぽりと入り込んでいるのがはつきりと見えた。

（汚い：：なんて汚らしいんだ：：やめろ：：吐きそうだ：：）

『おま○こ、おま○こ、超気持ちいい』

映像が激しく揺れてから、頬を上気させ濡れた唇をうっすらと開いている歌奈の顔が映る。彼女は体を上下に動かしながら少し首をかしげるように傾け、潤んだ瞳で画面に視線を送っていた。

（なんて：：なんて、いやらしい顔をするのだ、この女は：：）

今、こうして自分の肉体が男の上で腰を動かしている動画を見ながら股間へと指を這わせている間も、歌奈はこんな顔をしているのだろうか。恐ろしくて、鏡を見る事ができない。

ユリエルカは鏡の方へ視線が向いてしまわ

ないように、ひたすら画面を凝視する。
『ああん！ ユウキのおち○ちんっ、歌奈の
奥に当たってるよおお！』
（奥：：奥に：：男性器が：：当たっている
と：：この女は：：こんな顔をするの
か：：）
すでに性器を触っている指は、体の奥から
溢れてくる粘液でぬるぬるとぬめり、その滑
らかさが性欲をさらにたかめている。充血し
て膨らんだ陰核が指の腹でこすられ、耐え難
い快感が脳に蓄積されていく。
ユリエルカは指を愛液で濡らすと、膣の入
り口へと当てた。
「んっ：：」
それだけで、全身に快感の震えが広がるの
を感じる。
（騎士が、自分の指を性器に入れるなん
て：：そんな下劣な事を：：）
咄嗟に、精霊騎士としての理性がそれ以上
の事を押し留まらせようとするが、押し寄せ

る性欲の波に長く抗うことはできなかつた。
（違う、私じゃない。この体が、歌奈という
女の体がこれを欲しているんだ……この、下
層世界に住まう獣の体が……この淫らな体が
悪いのだ……上級騎士という高貴な血筋に生
まれた私が、自らこんなことを欲するわけが
ない……）
そして、愛液に濡れた指を膣の中へとそつ
と挿れる。
「あつ……あつ……」
思わず声が漏れた。
『歌奈、おま○こ……いつ、おま○こ気持ちい
いよっ！』
「お……おま○こ……気持ち……いい」
小さな機械の中から聞こえる声を真似て
言ってみる。
途端に、脳の奥を痺れるような感覚が貫い
た。魂とは別の無意識の部分で卑猥に感じる
その響きに酔ったようになりながら、ユリエ
ルカはその言葉を何度も脳内で繰り返す。

（おま○こ…私のおま○こ…）
細い足をくねらせて可愛らしい小さなリボ
ンのついた下着も脱ぐと、彼女は携帯電話を
握り締めたまま動画を真似て膝立ちになり、
立てた中指を下から自分の中へと挿し込ん
だ。
「ああつ…あああ…」
背筋を這い登る快感に体がぞくぞくと震え
る。
（なんてことをしているんだ…そこは…
指を入れる場所ではないのに…）
膣は伴侶となつた者が、子を得るために男
性器を入れる穴。それ以外ではないはずだ。
それなのに、気持ちいい。どうしようもな
く気持ちいい。
――ぬちゆ…くちゆう…
濡れきつた肉穴が指でかき回され、卑猥な
音を立てる。
画面の中で、また画像が激しく揺れた。
『あつ…おち○ちん、抜けちゃったよ』

『すぐ挿れてやるから』

眉を寄せ細く目を開いて画面を見ると、足を開いた歌奈は後ろへ倒され、その付け根に男のペニスを当てられている。

歌奈は片方の手で性器を広げて膣口をさらけ出すと、もう片方の手を伸ばして男根を取り、蜜を溢れさせる入り口に当てた。

再び、ゆつくりと男の先端が歌奈の股の間へと沈んでいく。

『あ……いいよ……おち○ちん……おま○この中で、びくびくしてるよ……』

（中で……中でびくびく……）

ユリエルカの脳裏に、帝国軍の屈強な男達に何度も繰り返し性器を蹂躪された時の感覚が甦った。

それに反応して膣の肉壁がぐちゅ、つと指を包む。

「うっ……うあ……」

指が締め付けられる感覚も、柔らかい膣壁が指を締め付けける感触も、全てが気持ちい

い。
押し寄せる快感に上体を起こしていられな
くなり、前に体を倒して肩を布団につけた。
その間も、指は臆の中でより気持ちのいい場
所を探してうごめき続ける。
（一本入っているのだ……もう一本ぐらい入
れても変わりないだろう……この女は、以前
には三本入れていたのだから、二本ぐら
い……）
ユリエルカはそう思い、一旦中指を抜くと
薬指を添えてもう一度挿れなおした。
――うちゅつ
絡めるようにまとめた二本の指が、濡れた
入り口を一気に通り抜け肉壁をかきわけなが
ら奥へと入った。
「うあああつ！」
一層の締め付けと一層の快感に、思わず大
きな声が出てしまう。
歌奈の両親に声を聞かれてしまうのを恐
れ、ユリエルカは顔を枕へ押し付けた。そし

て、携帯電話を枕の横へ置き、空いた手でパ
ジャマの上から胸に触る。

「胸：：胸と：：おま○こ：：：気持ちい
い：：：」

言葉にして言ってみると、それだけで快感
が増幅されるような気がする。

「気持ちいいよ、歌奈、気持ちいいよお
：：：」

（私が：：私が悪いのではない：：）

なにがどう悪くないのか、それを考えるの
さえ、もう面倒だった。とにかく自分は悪く
ないと必死に言い聞かせつつ、ユリエルカは
歌奈が男に責められ歓喜の声を上げているの
を聞きながら指をぐちゅぐちゅと出し入れし
続けていた。挿入を繰り返している二本の指
の股に愛液が伝う。

「歌奈、お、俺っ：：：もう：：：もう：：：」

「ちゃんと外に出してよっ！」

「あ、ああ：：：わかってる：：：」

（手が：：手が：：止まらない：：この女の

手が：：）
『歌奈もおま○こいくよ！ おま○こ、おま
○こいつちやうううう！』
「私も：：私も：：お：：おま○こが：：」
ささやくような小声で言いながら、片手で
枕を強く握り締め、指を思い切り奥まで突き
こんだ。
――ぶちゆう：：ぐちゆ：：
「あつ！：：あ、ああつ！」
中で指先を動かし、特に気持ちのいい一点
を繰り返し指で突く。
『おま○こいくよつ！ ユウキのおち○ちん
で、歌奈、おま○こ、いつちやう
よおおお！』
「あつ、中つ！ 中がいいつ！ あ、あ、
ああつ！ 止まつ、止まらなつ、あつ、ああ
ああああつ！」
――ぎゅちゅつ：：
歌奈の細い体のどこにそんな力があるの
か、膂壁が強い力で指を締め付ける。ユリエ

ルカは顔を枕に押し付け、叫びとも嗚咽ともつかないくぐもった声を上げながら、勢い良く腰を二三度、跳ねるように後ろへ突き上げた。全身がぎゅつと緊張したまま、小刻みに震え続ける。

やがて、全身が弛緩してくずれるように体を伸ばしたユリエルカが放り出されていた携帯電話を取ると、画面には腹の上に妙に透き通った精液を細々と放出された歌奈の姿が映っていた。

歌奈が指でその粘液を塗り広げながらカメラ目線になる。

『超気持ち良かったよ♪ ユウキのおち○ちんで歌奈、最高に感じて、メチャクチャにイっちゃった』

（嘘だ：：この女は嘘つきだ：：本当に達したら、こんなすぐに喋れるものか：：）
痺れたような思考の片隅で、ぼんやりと思う。

機械からは、二人の会話が聞こえてきた。

『ねえ、動画欲しい？』

『今から俺の部屋でもう一回やろうぜ。小遣いやつから、動画もくれよ』

『いいよお♪ 今日、自転車？』

『んなわけねえだろ、パクった原付だよ』

『じゃあ、続きはユウキの部屋で♪』

動画は、そこで終わっている。

ユリエルカは携帯電話をパタリ、と音を立
てて閉じた。

そして、淫液に濡れた指を顔の前にかざ
す。

（淫らな：：こんな淫らな女の体に転生した
せいで：：こんな：：こんな：：）

愛液でぬらぬらと光る指を見ているうち
に、彼女はたまらなく情けなくなってきた。

（嫌だ：：こんな淫らな体は：：：：私に
は：：耐えられない：：）

たった一度、敵の手で強引に体を穢された
がために、彼女はこの世界で肉欲に支配され
たまま一生を過ごさなければならぬのだろ

うか。

（∴∴女神よ、これではあまりにも無慈悲ではないか∴∴）

ユリエルカは異世界にいるはずの自分の守護神へと語りかけたが、神官のいないこの世界ではその返事を聞く事はできなかつた。

※体験版はここまでです、続きは製品版でお楽しみください。